

邪馬台国と大和国を繋ぐ

2023/04/03

塚田和正

まえがき

九州に魏志倭人伝の言う「邪馬台国」を都とする九州王権があり、畿内には奈良盆地を都とする畿内王権が一時期共存していたとする説を筆者は採っている。

本論に言う畿内王権とは一般的に使われている大和政権、大和朝廷のことである。

この王権は奈良時代に「大和（やまと）国」が制定される以前、既に魏志倭人伝の時代には畿内に存在していたとして「畿内王権」とした。

なお「邪馬台国」については、その漢字表記論争とその読み方論争がある。しかし本論ではその論争問題には一切関わらない。「邪馬台国」は汎用表記として使い、またその読み方は「やまと」として論議を進める。

畿内王権が都とした奈良盆地を「大和国」と書いて「大和」を「やまと」と読んだことと、「邪馬台国」の「邪馬台」の読み方に繋がりがあると考えるのが自然である。

この繋がりについては邪馬台国論者間の大きな論点であり、未だにそのあるべき真の正解を見いだせていない。

邪馬台国論を論ずる多くの論者は日本や中国の歴史書などに精通し、あらゆる歴史書を駆使して「邪馬台国」と「大和国」を結び付けようと議論を展開している。

筆者は残念ながらそれらの歴史書に全く精通していない。むしろ知らないに等しいほどの知識しかない。しかし無知であるが故に歴史書にとらわれない見方ができる長所がある。

筆者は中国と日本のその時の当事者の立場に立って史実の裏を読み解き、一方で現代社会の一般人の常識を基に「邪馬台国」と「大和国」がどう繋がるかを推理した。

1. 奈良時代までの畿内王権の中国対応

筆者は魏志倭人伝の時代には、九州に「邪馬台国」を都とした九州王権と、奈良盆地を中心とする畿内王権があったと推測する。

畿内王権の弱点は日本海に面していないため朝鮮半島や中国から進んだ文化や技術を直接取り入れることができなかつたことにある。

畿内王権が中国や朝鮮半島と交易するためには日本海に面している九州王権や出雲王権を通す必要があり自由な交易はできなかつた。

畿内王権にとって自由な交易のためには日本海側に拠点を設けることが必須であった。

畿内王権は日本海側に拠点を設けるため魏志倭人伝の時代から瀬戸内海を西方に向けて周辺国を支配下に治め、瀬戸内海航路を開拓していったと考える。

畿内王権は日本海側に交易拠点を設けることが目的であり、九州王権を倒すことは目的ではなかつた。

また九州王権も遠く離れた畿内王権の領域まで勢力を拡大する意図は無かった。

従って両王権の間に争いは無かったと考える。

筆者の推論の基本は、畿内王権が九州に達したころには既に連合国から成る九州王権は分解していたとすることにある。

畿内王権が瀬戸内海の九州北部に達したころには、魏志倭人伝に記されていた九州王権は崩壊していた（四世紀？）と考える。

従って九州王権の都のあった「邪馬台国」も消滅していた。九州の国々は分裂しており、日本海側に拠点の設けようとする畿内王権に共同で対処する状況ではなかった。

そのため畿内王権は容易に北九州を支配下に治めることができた。（四世紀半ば？）

しかし朝鮮半島への航路であった壱岐はまだ元九州王権の国の勢力下にあった。

畿内王権は北九州の宗像を拠点港とする宗像—沖ノ島—対馬—朝鮮半島の航路により独自の中国、朝鮮半島との交易を始めた。

畿内王権は宗像、沖ノ島を朝鮮半島航路の重要な中継拠点と位置付け重んじた。（宗像三女神の伝承）

畿内王権は朝鮮半島に進出した。（四世紀末：好太王の碑文）

畿内王権は朝鮮半島の利権確保のため、宋に対して朝鮮半島を治めるのは倭国王であることを認めさせた。（五世紀：宋書倭国伝・倭の五王）

畿内王権に対する九州勢力の反乱が起こった：磐井の乱（六世紀前半）

畿内王権は遣隋使を中国に送り、対等の扱いを求めた。（七世紀：隋書倭国伝）

中国が国名を「倭国」、「日本国」の両方を使用（七世紀：隋書倭国伝・旧唐書）

畿内王権が白村江の戦いに敗れ朝鮮半島から撤退（七世紀半ば）

中国が国名「日本国」を承認（八世紀初・旧唐書）

畿内王権の都の奈良盆地を「大和（やまと）国」と書くことを制定（八世紀半ば）

2. 中国国史における「倭国」と「邪馬台国」の位置づけ

中国国史には「邪馬台国」の位置づけが示されている。時代ごとに少しずつ扱いが違っていると考える。以下に「倭国」と「邪馬台国」の関係を示す。

国史	日本の国名	邪馬台国の扱い
(1) 魏志倭人伝	倭国	邪馬壹国女王之所都
(2) 後漢書倭伝	倭国	大倭王居邪馬臺国（今は邪摩惟）
(3) 梁書倭伝	倭国	邪馬臺国即倭王所居
(4) 隋書倭国伝	倭国	都於邪靡堆（魏志の邪馬臺国）

これらの国史の「邪馬台国」は（1）魏志倭人伝の記載を引用して記されている。

注目すべきは、日本国名は「倭国」であるが「邪馬台国」については記載に変化がみられる。

（1）魏志倭人伝では「邪馬壹国は女王が都を置いている所」。

この女王とは卑弥呼を言っていることになる。

(2) 後漢書倭伝では「邪馬臺国は（今は邪摩惟という）大倭王の居住地」。

(3) 梁書倭伝では「邪馬臺国とは倭王が居住する所」。

(4) 隋書倭国伝では「都は邪摩堆にある（魏志にいう邪馬臺国）」。

これから「倭国」の都は「邪馬台国」にあることがわかる。しかし「邪馬台国」全部が都であるとは言っていない。すなわち「邪馬台国」の中に倭王が居る都があることを意味していることになる。

倭王の王宮のあるところは「倭国」の都であり、「邪馬台国」の都ではない。

(2) の邪摩惟、(4) の邪摩堆とは「邪馬台国」の誤りを正そうとしたと考える。

またそれぞれの国史には「邪馬台国」がどこにあるのか、その国史が書かれたころにも存在したのかは明確ではない。

畿内王権はこれらの中国国史の内容を全て知っていたことなどあり得ない。

しかし畿内王権は「倭国」には「邪馬台国」があり、その「邪馬台国」には倭王が居る都があったことは理解していたと考える。

3. 畿内王権の対中国施策

畿内王権は自らの王権の都が中国国史にある「邪馬台国」ではなかったことから、中国に対しどのように対処すべきか策を練った。

魏志倭人伝に記された王権と畿内王権は繋がっていることを中国に示すこととした。

そのために以下の三つの施策を推進したと考える。

施策1. 都は「邪馬台国」になければならない

魏志倭人伝に「倭国」の都は「邪馬台国」にあると記されており、そのことがそれ以降の中国の国史に引用されてきた（後漢書倭伝、梁書倭国伝、隋書倭（倭）国伝など）。

この事実を畿内王権はいつ頃、どのように知ったかは分からない。

畿内王権の役人、学識者が各時代の国史を全部調べることなど不可能であることから、その大部分は中国の学識者から得た知識であろう。

そのころの畿内王権の都は奈良盆地にあった。当然「邪馬台国」とは呼ばれていなかったことになる。

そこで畿内王権は中国の国史の事実に合わせてすることにしたと考える。

日本の王家は魏志倭人伝に記された「邪馬台国」の時代より今に続いており中国の王家よりはるかに長い伝統があることとして中国に誇ることにしたのであろう。

このため畿内王権の都があった奈良盆地を魏志倭人伝にある「邪馬台国」としてとらえたと考える。

ここが魏志倭人伝に言う「邪馬台国」ではないことが中国側にわかってしまった場合は都の「邪馬台国」をここに遷都したという言い訳を考えたとあろう。

この遷都の言い訳が神武東征の神話として残ったと考えられる。

この王家を支えている畿内王権は中国以上の長期王権であることを誇示したかったのではないか。

畿内王権は都のある奈良盆地を「邪馬台国」としたが、これはあくまで中国向けに付けた地名であり、国内では一般名としては使われていなかったと考える。

魏志倭人伝にある「邪馬台国」はその後の後漢書倭伝、梁書倭国伝、隋書倭（倭）国伝などに引用され伝えられおりその表記は様々である。

邪馬壹 邪馬臺 邪摩惟 邪靡堆 耶摩推 邪馬臺

これらは表音漢字で表されているので漢字の意味とは関係していない。国史が作られた年代により使われている漢字が変わっている。それは発音を基として使う漢字が間違っていると変えたか、あるいは誤写により全く異なる漢字が当てられかであり真の漢字表記及びその発音は解明されていない。

畿内王権は奈良盆地に置いた「邪馬台国」の発音の正誤に関わらないこととして、王権として「邪馬台」に対応する日本語としての発音を「やまと」とすることに定めた。

「やまと」の発音は一本化されたが、これを表す漢字表記については中国の国史に使われた漢字が使われたのか、日本独自の発音による漢字が使われたかは不明である。

奈良盆地を「やまと」とする表現は徐々に浸透していったと考えられる。

その後の万葉集などでは様々な「やまと」の漢字が使われており、この時点では一本化はなされていなかった。

結論として畿内王権はかつて九州王権の都があった「邪馬台国」を引き継いで畿内王権の都である奈良盆地に「邪馬台国」を造り対中国政策として政治利用したと考える。

施策2. 中国が名付けた「倭国」という国名を変えたい

日本が中国から「倭国」と呼ばれていたころに使われていた「倭」の漢字には蔑み、卑しむという意味があることがわかったのはいつ頃であろうか。これを知るきっかけとなったのは多分中国の学識者や役人からであろう。

中国から見ると東方の海中にある野蛮人が住む国とであるとして「倭国」と名付けて卑下していたことになる。

畿内王権は、日本は少なくとも隣国の朝鮮半島の国々以上の文明国であると自己評価していたと考えられる。

朝鮮半島の南部にある「韓国」という国名の「韓」という漢字には「倭」の蔑み卑しむという意味合いは無くむしろ誉め言葉に近い意味で使われていることがわかったのではない。その上朝鮮半島の国々まで日本を卑下して「倭国」と呼んでいることがわかった。

畿内王権は中国の見方が野蛮国扱いであったことに落胆したのでであろう。そこで畿内王権はまず「倭国」と言う国名を変えてもらおうとしたと考える。

全く違う国名に変えるのは中国側としても抵抗があることを考慮して「倭」と同じ発音である「和」に変えて「倭国」を「和国」とすることを提案したと考える。

しかしながら中国からはこの提案は全く相手にしてもらえなかったであろう。中国からすればまだまだ文化程度の低い国であり「倭」がふさわしいと判断した。畿内王権は日本の国力は弱く、文化度も低いという実状からきていることを悟った。畿内政権は国名を変えてもらうには自国の強大化と文明度を上げて中国に近づかなければならないことを自覚した。

そこでまず国力は朝鮮半島の国々より高いことを中国に認めてもらおうと朝鮮半島に進出した。(好太王の碑文、)

中国から国力としては朝鮮半島の国々を越えていると評価された。(倭の五王)

次に大きな墳丘墓などを建造して文明度も技術も高いことを示した。

この様な実績を基に「倭国」は大きく発展したとして、「倭国」を褒めたたえる意味合いて「大」を付けて「大倭国」に国名を変更してくれるように中国に申し入れた。

畿内政権ではさらに高い文明度を示すために大きな宮殿を建て、仏教を導入し大きな寺院を建てるなどして中国に文明度を近づける努力をした。

しかし「大倭国」への変更はならなかった。

そこで畿内政権は方針を変更した。既に中国並みの文化度に達したものとして盛んに中国に使いを派遣して対等の扱いをするように迫った。(遣隋使)

対等であれば何も中国が名付けた「倭国」、それに繋がる「大倭国」などの中国繋がり
の国名にこだわる必要が無いと判断した。

そこで「中国より先に日が昇る国」として「日本国」の国名を申し入れした。

それは中国から卑下された国名「倭国」に比べて「日本国」は中国より優位性を感じ取れる国名であった。

その後も積極的に中国の文化を取り入れ文明度を高めた。

その結果中国も折れて「倭国」「日本国」どちらも使われるようになった。

八世紀に入ると「倭国」に代わって「日本国」が中国より正式に認められた。

施策3. 読み誤りから生まれた「邪馬台国は倭国」である

魏志倭人伝では「倭国」の都は「邪馬台国」にあることが明確に記されているが、その後の歴史学者や畿内王権の役人がそのことを伝えて聞いて行く中で、どの時代からか誤って解釈されるようになったと考える。

説1) 『「邪馬台国」にある都に倭王が居る』と『「倭国」の都に倭王で居る』が誤って混同されて「邪馬台国」は「倭国」のことであるとされた。

説2) 日本の国名は中国語では「倭国」であり、日本語では「邪馬台国」であると解釈された。

結果として「倭」と「邪馬台」とは同じ「日本」を指しているとされた。

「邪馬台国」の「邪馬台」は「やまと」に定められると「倭」も日本語として「やまと」と読まれることとなった。

さらに「倭国」に変えて「日本国」が正式の国名となると「日本」も「やまと」と読まれることとなった。

『「倭国」の都は「邪馬台国」』にあるとする正論と『「倭国」と「邪馬台国」は同義語である』との矛盾する異論が並び立ってしまった理由はわからない。

現代も「倭国」と「邪馬台国」は同義語であると解釈している邪馬台論者はいる。

4. 「大和（やまと）国」の成り立ち

魏志倭人伝の記載では「倭国」の都は「邪馬台国」にある、あるいは「邪馬台国」には「倭王」が居ることがその後の中国の国史に引用されてきた。

この事実を知った畿内王権は、王が居る奈良盆地を中国国史に記載された国名と同じ「邪馬台国」と名付けた。

畿内王権は王が居る奈良盆地を「邪馬台国」と名付けたのは、魏志倭人伝の時代から王権が繋がっていることを中国に示すためであった。

「邪馬台国」の表記は中国に対し表向きだけに使われ、国内では通用していなかったと考えられるが、奈良盆地を「邪馬台国」と名付ける以前の呼び名はわからない。

畿内王権は「邪馬台国」の「邪馬台」を日本語の発音として「やまと」に定めた。

八世紀初めに中国が国名「倭国」を「日本国」に変えることを認めた

畿内王権は奈良盆地に置いた「邪馬台国」を日本語表記の漢字に統一することにした。

統一されるに至る経緯は大倭→大養徳→大倭→大和となる史実から明らかである。

畿内王権の中国に対する「倭国」の国名変更要求の経過が「大和（やまと）国」制定の過程に関係していると推測する。

この中国に対する国名変更要求を時系列に推理する。

- (1) 「倭国」の「倭」の漢字を「和」に変えることを提案—中国拒否（六世紀？）
- (2) 「倭国」に大を付けて「大倭国」とすることを提案—中国拒否（七世紀？）
- (3) 「倭国」に代えて「日本国」とすることを提案—中国承諾（八世紀初め）

(1) (2) は史実上どこにも表れてこないが、当時の日本の立場になって考えれば屈辱的な国名「倭国」を変えたいという強い願望があったと推測できることから、常識的には有り得たことである。これは後の「大倭」を「大和」とした「大和国」制定に至る経緯からも読み取れる。

畿内王権は中国が名付けた国名「倭国」を「日本国」に変えることができたので、次に奈良盆地に置いた中国語の「邪馬台国」に対応する日本語を統一することにした。

「邪馬台」と「倭」は同義語であるとして「倭」を語源とした日本語が検討された。

- (4) 「邪馬台」に「倭」を当てる案は中国語の「倭国」と重なり不採用
- (5) 次に(2)に基づいて「大倭」と書いて「やまと」とする案も「倭」が使われていることから不採用
- (6) 「大養徳」を経て再度「大倭」としたが「倭」が使われていることから不採用

(7)「大倭」の「倭」を(1)にならって「和」として「大和」と書いて「やまと」と読ませることで正式採用(八世紀半ば)

「倭」「日本」が「やまと」と読まれ(~八世紀)、それに続いて奈良盆地の「やまと」が「大和」と書かれることとなった。

「大和」を漢字の音読みで「やまと」と読むことはできないので全くの当て字である。

従って「大和」を「やまと」と読む政令以前は「やまと」の漢字に「大和」を当てていたことはあり得ない。

万葉集には「やまと」として多くの漢字表記が使われている。

「やまと」として使われた漢字の多くは「倭」「日本」および「山跡」である。

「倭」「日本」の「やまと」は日本全体を指し、「山跡」やその他の漢字表記は奈良盆地を指していると考えられないか。

万葉集は奈良盆地の「やまと」が「大和」と制定される以前の編纂であることから万葉集では「大和」は使われていないことになる。

もし「大和」制定以前の書物に「大和」が「やまと」として使われているとしたら、それは後世の写本制作に際して「大和」に置き換えられたと考えられる。

結論として

「大和(やまと)国」は日本を表す中国語「倭国」の「倭」に相当する漢字表記、並びに都の地を指した中国語の「邪馬台国」の日本語の読み方「やまと」の二つを共通の語源とする日本語と言える。

5. 推論から除外した定説

「邪馬台国」と「大和国」を繋ぐに便利な邪馬台国論として以下の二つの定説が知られている。しかし筆者はこの二つは非現実的な説として検討から除外した。

1) 邪馬台国畿内説

魏志倭人伝に記された「邪馬台国」は元々畿内にあり、その畿内王権の都である「邪馬台国」の地が奈良時代に「大和国」になったとする説である。

纏向遺跡などから畿内に王権が存在したことは明らかである。しかし魏志倭人伝に記載された行程では「邪馬台国」と畿内は結びつかない。「邪馬台国」を畿内とするためには魏志倭人伝に記された行程を大幅に書き換えねばならない。

魏志倭人伝に誤りがあるとして大幅に書き換えるということは、魏志倭人伝そのものを否定することに等しい。魏志倭人伝の行程を全く信用できないとして否定しておきながら「邪馬台国」の存在のみを肯定することは大きな論理矛盾である。

このことから邪馬台国畿内説の見識者は、魏志倭人伝の行程を畿内とするための議論には矛盾が起こるため立ち入ることを避けている。

代わりに邪馬台国畿内説の見識者は魏志倭人伝に記された「邪馬台国」と同時代の遺跡や

埋蔵物を発掘することにより、同時代の遺物があるところは「邪馬台国」であろうと間接的に示し自ら断定はしないことにしている。

2) 邪馬台国東遷説

九州にあった九州王権が畿内に攻め入り畿内王権を滅ぼし、そこに九州にあった「邪馬台国」を遷都して、その地が奈良時代に大和国になったとする説である。

畿内には纏向遺跡などにより畿内王権の存在は確かである。

九州王権が畿内まで攻め入り畿内王権を倒す必然性がどこにあるのであろうか。

降伏したとはいえ九州から遠く離れた敵国の都であった畿内の地に、九州から都だけを移す必然性がどこにあるか。

畿内王権を倒した九州王権が九州を引き払って畿内に住民ごと大移動したということも論理的にあり得る。例えば阿蘇大噴火により九州に住めなくなって民族大移動の必要が生じたなどが考えられるがそのような史実はない。

九州王権が畿内まで攻め入り畿内王権を降伏させて再び九州に戻るのであればまだ合理性はある。しかしこの場合は都を畿内に移してはいないことになってしまう。

九州王権と畿内王権の存在が両立でき、かつ九州邪馬台国説と畿内の大和国と日本神話とを結び付けるために編み出された非現実的な論理であると考えられる。

あとがき

「邪馬台(???)国」と「大和(やまと)国」の発音に類似性があるとすればその関連性を考えるのは自然である。これまでもそれを繋ぐための議論がなされてきた。

筆者もごく普通の常識人として考えて「邪馬台国」と「大和国」をどうすれば合理的に結び付けられるか推論した。

畿内王権が対中国施策として、

(1) 中国が名付けた国名「倭国」を嫌い最終的に「日本国」に変えさせた

(2) 都のある奈良盆地を魏志倭人伝にある「邪馬台国」として「やまと」と呼んだ。

などを実行した過程の中で「邪馬台国」と「大和国」が関係づけられたと考える。

この推論は一般常識として当時の国状を考えれば想像できることであり、何らかの意図があっても無理やりこじつけたものではない。

従ってこじつけを正当化する必要は無く後世の文献などの引用は一切してない。

本論は史実的な裏付けもない推論に過ぎないことも事実である。

よって全くの空論に過ぎないと史実を基に片付けられてしまうことも有り得る。

本論の全てが空論とは思わないので、「邪馬台国」と「大和国」を繋ぐ一つの方策として今後の論議の参考になれば幸いである。